定期テスト 得点UP 問題

得点 ／100

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

チョウを右手に隠して、僕は階段を下りた。そのときだ。下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然、①自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながら擦れ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

②すぐに僕は、このチョウを持っていることはできない、持っていてはならない、元に返して、できるなら何事もなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということを極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分ののちにはまたエーミールの部屋の中に立っていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。③クジャクヤママユは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを、僕は見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中で腰かけていたが、ついに一切を母に打ち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、既にこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとって、つらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに、行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っているもののうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、ほかの友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。④彼が僕の言うことを分かってくれないし、恐らく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もって、はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがクジャクヤママユを台なしにしてしまった、悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのか分からない、と語った。僕はそのチョウを見せてくれと頼んだ。二人は上に上がっていった。彼はろうそくをつけた。僕は台なしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直す由もなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた。

すると、エーミールは激したり、僕を怒鳴りつけたりなどはしないで、低く、ちぇっと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから「⑤そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。

そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」と言った。

その瞬間、⑥僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまい、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、侮るように、僕の前に立っていた。彼は罵りさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

そのとき初めて⑦僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。⑧母が根掘り葉掘り聞こうとしないで、僕にキスだけして、構わずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、床にお入り、と言われた。僕にとってはもう遅い時刻だった。だが、その前に僕は、そっと食堂に行って、大きなとび色の厚紙の箱を取ってき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そして⑨チョウを一つ一つ取り出し、指で粉々に押し潰してしまった。

〈ヘルマン・ヘッセ／高橋健二訳「少年の日の思い出」より〉

(1)　――線①「自分は盗みをした、下劣なやつだ」とありますが、これと同じ気持ちが書かれている部分を、文章中から十三字で抜き出しなさい。（5点）

(2)　――線②「すぐに僕は、このチョウを持っていることはできない、……何事もなかったようにしておかねばならない、と悟った。」とありますが、「僕」がそのように思ったのはなぜですか。「盗み」と「罪」という言葉を使って、三十字以内で書きなさい。（10点）

(3)　――線③「クジャクヤママユは潰れてしまったのだ。」とありますが、どういう経過で潰れてしまったのですか。「『僕』は、クジャクヤママユを右手に隠し、……」に続くように、三十字以上三十五字以内で書きなさい。（15点）

「僕」は、クジャクヤママユを右手に隠し、

(4)　クジャクヤママユを潰してしまったことに対する深い後悔や、クジャクヤママユをかけがえのないものだと思う「僕」の気持ちが表れている一文を文章中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。（10点）

(5)　――線④「彼が僕の言うことを分かってくれないし、恐らく全然信じようともしないだろう」とありますが、「僕」はどのようなことを分かってほしかったのですか。次の文の□に当てはまる言葉を書きなさい。（5点×2）

最初からクジャクヤママユを□つもりだったわけではなく、まして□気など全くなかったということ。

⇐問題は次ページに続きます。

(6) ――線⑤「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」とありますが、エーミールは「僕」がどのようなやつだと言っているのですか。適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。（5点×2）

ア すぐに謝りに来ない、ずるいやつ。
イ 人のものを平気で盗むやつ。
ウ 友達に対してうそをつくやつ。
エ 謝れば済むと考える単純なやつ。
オ チョウを乱暴に扱うやつ。

□ □

(7) ――線⑥「僕はすんでのところであいつの喉笛に飛びかかるところだった」とありますが、それはなぜですか。「自負」という言葉を使って、三十字以内で書きなさい。（15点）

(8) ――線⑦「僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った」とありますが、「僕」はこのことをどのような体験によって悟ったのですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。（5点）

ア 謝罪や弁償では済まされず、相手が自分を罵る言葉を、黙って聞いているしかなかったこと。
イ 何をもってしても取り返しがつかず、自分が悪で相手が正義という構図を受け入れ、軽蔑に耐えるしかなかったこと。
ウ 品物によっては償うことができず、心からの謝罪をすることによってしか、相手の許しを得ることができなかったこと。
エ ただ謝罪するだけでは許されず、壊してしまったものと同等の物を渡すことでしか物事が解決しなかったこと。

□

(9) ――線⑧「母が根掘り葉掘り聞こうとしないで、僕にキスだけして、構わずにおいてくれたことをうれしく思った。」とありますが、このときの母の気持ちとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。（5点）

ア 息子に深い反省を促そうという気持ち。
イ 息子が正直に謝りに行ったことを喜ぶ気持ち。
ウ 息子の傷ついた心をいたわる気持ち。
エ 息子の心を何とか理解しようとする気持ち。

□

(10) ――線⑨「チョウを一つ一つ取り出し、指で粉々に押し潰してしまった」について、次の各問いに答えなさい。

1 このときの「僕」の心が反映された情景を表した言葉を、文章中から三字で抜き出しなさい。（3点）

□

2 **思考力・判断力・表現力** 次の会話文は、――線⑨の行為に込められた意味について、生徒たちが話し合ったときのものです。□A・Bに当てはまる言葉を後から一つずつ選び、記号で答えなさい。（6点×2）

林　直前で「僕」が悟った内容を踏まえると、この行動にはいくつかの意味があり、その後の「僕」の人生に大きな影響を与えたと思う。
藤　そうだね、チョウを一つ一つ潰して粉々にして二度と戻せないようにするということは、□A□を象徴しているのではないかな。
枝　ほかにも、エーミールが「僕」に対して償いの機会を与えなかったことを考えると、□B□という意味もあったのかもしれないね。

ア チョウへの熱情を抱いた少年時代との決別
イ 自分の身の潔白の証明
ウ エーミールとの友情の断絶
エ 罪を犯した自分への罰
オ 壊れてしまったチョウに対する八つ当たり

A □
B □

解説

(1) 「下劣」とは、品性が劣っていること、正しい道を踏んでいないこと。5～6行目に、「大それた恥ずべきことをした」とあり、自分のした行為を、品性の欠けた誤ったものだと認めていることが分かる。

(2) 直前の段落に書かれた心情を理解する。良心に目覚めた「僕」は、盗みをした自分は「下劣なやつ」で、また、ものを盗んだという行為は「大それた恥ずべきこと」と悟っている。つまり、自分のしてしまった「盗みをはたらく」という罪の重大さに気がついたのである。

要点例 盗みをはたらくような罪深い人間だと思われたくないから。〈27字〉
（自分自身がどのように見られるかを気にしているのではない。自分が盗みをしてしまったことの罪深さに気づいたという内容に直す。）

(3) 冒頭の「チョウを右手に隠して、僕は階段を下りた。」以降の、「僕」の動きを捉える。チョウを隠していた手を、「上着のポケットに突っ込んだ」まま、ゆっくりと歩き続けたが、ふと、自分の犯した罪を意識し、エーミールの部屋に引き返すため、階段を駆け上がった。しかし、エーミールの机の上にチョウを置いたときにはチョウは潰れていたのである。

記述ポイント チョウを隠した右手を「ポケットに突っ込んだまま」という要素は不可欠である。

(4) クジャクヤママユを潰してしまったことに対する「僕」の気持ちは、第三段落に書かれている。この段落の最後の文にあるように、このチョウを元に戻すためなら何でもしようと思えるくらい、かけがえのないものだと思っていることが読み取れる。

(5) クジャクヤママユを最初から盗むつもりではなかったことと、クジャクヤママユを潰すつもりはなかったこと、「僕」はこの二点を本当は伝えたかったのである。

(6) エーミールが「そんなやつ」と言って軽蔑しているのは、一つは「僕」が盗みをしたことである。もう一つは、53～54行目で「君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ」と言っていることから、チョウを乱暴に扱って潰したことである。

(7) 直前の「君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ」という言葉は、「僕」はチョウを収集しているくせにひどい取り扱いしかできないという意味である。それは「僕」がチョウを大切に思う気持ちを自負していたことを否定するような言葉でもある。このことが、「僕」をひどく傷つけ、「喉笛に飛び」かかりそうになるくらい、「僕」を追い込んだのである。

(8) 「僕」が償いを申し出たことに対し、エーミールがどういう対応をしたかということから考える。エーミールは謝罪も償いの申し出も受け入れず、かといって罵ることさえせず、ただ、「僕」を眺めて軽蔑するだけだった。「僕」は、そんなエーミールの態度に耐えるしかなかった。この経験が、「僕」に「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」ということを悟らせたのである。

(9) 母は「僕」がどれほど苦しんでいるか理解している。それで、「僕」の傷ついた気持ちをいたわり、「根掘り葉掘り聞こう」とはしなかったのだ。

(10) 1 一度起きたことは償いができないということを悟り、「僕」は、やり場のない暗い気持ちに陥る。「闇の中」は、そんな「僕」の気持ちが反映された情景だと考えられる。

2 A林さんの「その後の『僕』の人生に大きな影響を与えた」という言葉に着目する。チョウを粉々に押し潰すという行為は、チョウの収集に象徴される少年時代特有の「熱情」に、「僕」が決別することを意味していると考えられる。Bエーミールに謝罪の言葉も償いの申し出も拒否された「僕」は、自分で自分を罰するしか罪を償う方法がない。よってチョウを潰すことは、自分を罰する意味もあったと推測できる。